

★支部大会研究発表題目

◎二〇〇六年秋季大会

「11月11日 於・京都大学」

- ・京文舎文京『名廣澤邊萍』試論 佐藤 淳（神戸大学大学院）

- ・表現の力―齋藤茂吉の萬葉理解と写生の深まり― 足立匡敏（大阪市立大学大学院）

- ・村上春樹の「故郷」をめぐる（記憶） 松枝 誠（立命館大学大学院）

- ・「春婦伝」が照らし出すもの―戦場の性と戦後の欲望 天野知幸（日本学術振興会特別

研究員（PD））

◎二〇〇七年春季大会

「6月9日 於・大阪大学」

（シンポジウム）

鉄道―関西近代のマトリクス

- ・司会 日比嘉高・天野勝重

- ・蒼井雄『船富家の惨劇』の時刻表

トリック

浦谷一弘（龍谷大学大学院）

- ・関西の鉄道と泉鏡花 田中勲儀（同志社大学）

- ・「関西」と「鉄道」のデイスポジション―横光利一の場合 田口律男（龍谷大学）

・「私鉄王国」の近代―阪急を中心として

原 武史（明治学院大学）

★支部大会印象記

二〇〇六年秋季大会印象記

（午前の部）

今回の大会は、自由発表として明治初期戯作から村上春樹まで、多彩な研究発表が行われた。前半二本の発表は、いずれも従来あまり顧みられることのない対象に挑み、再評価をめざすものだった。

最初の佐藤氏による「『名廣澤邊萍』試論」は、京文舎文京の戯作とちの政治小説との接合の可能性を探ったもの。大衆事件、広沢真臣暗殺事件などの政治的な題材を扱い、痛烈な藩閥政治批判がこめられていることを、作品成立の事情、出版当時の評判、発禁の事情、物語内容の分析から明らかにしようとする丁寧な論証が興味深かった。発表の主眼は、政治小説が立ち上がったてくる以前に、戯作の中から政

治的なものが浮上してくるという点に置かれていた。会場からは、物語の構成上の軽重、戯作者としての文京のモチーフの如何、発禁の問題、戯作と政治小説との区分などに関して質問があった。戯作における政治性については、現実の歴史的事実と物語とを照らし合わせて藩閥批判が読み取れるとされていたが、その依拠する言説は、主に登場人物によるものだった。しかし、反体制活動を中心とする物語展開において政府を批判する言説が飛び交うのはごく当然なようにも思われる。その意味では、政治的なもの内実がやや平板なのが気になった。むしろ政府の要人暗殺といった血なまぐさい政治の闇の部分に、もしくは権力抗争における敗者の情念といったものに向き合い、そこに混沌としたエネルギーを内在させた戯作的な想像力が鋭く切り込んでいくことにこそ、当時の戯作における政治性を再評価する糸口があるのではないだろうか。

次の足立匡敏氏は、「表現の力―齋藤茂吉の万葉理解と写生の深まり」と題して、「万葉語「なべに」の使用の仕方の変化を四段階に分け、茂吉の歌論との関わりを論じた。それによれば、「なべに」は初期には言葉の響きやリズムの面から着目されたが、やがて独自のな（写生）理論と結びつけられ、言葉の意味や機能を重視し、現代語では得られない多様な微細な（写生）に到達したという。ひとつの小さな言葉に注目し、そこから茂吉の全体像に迫ろうとする姿勢には共感できた。ただ、その整然と区分された四段階の発展説については、きれいに分けられている

だけに、逆にそこからはみ出すものがないのかどうか、あるいは会場からの質問にもあったように、行きつ戻りつするような揺らぎをおさえる必要があるだろう。また、表現論的なアプローチをとった今回の発表では、社会的歴史的背景は意識的に排除したとされたが、同時代の歌人たちの活動との関わりも含めて、さらに幅広い視点からの考察も必要のように思われた。

（関肇）

（午後の部）

関西支部秋の大会後半の発表は、村上春樹と田村泰次郎についてであった。現役作家と戦後文学という違いはあるが、村上はまだ評価が定まってはおらず、田村については研究がようやく緒についたばかりと言ってよいであろう。

松枝誠氏の「村上春樹の「故郷」をめぐる「記憶」と、天野知幸氏の「春婦伝」が照らし出すものは、「暴力」という言葉に集約される表現上の問題が共有されていたように感じられた。もっとも「暴力」という語は、村上春樹自身が使用していたのだが、つまり、西宮港を埋め立てること、さらには朝鮮戦争という暴力の極致が村上の小説の背景になっているわけである。松枝氏の発表に対して、佐藤秀明氏から阪神大震災の前後で村上がどのように変わったのかという質問が出されたのは、至当なことだと思われた。「暴力」ということで、景観の変化について言及する以上、そこへの目配りは必要ではないだろうか。ただ、オウムにしても

村上には現実に取りこつた事件を取り込んで小説化しているの、年表にしてその差異を報告されたことは興味深いことであつた。

最後の天野知幸氏の報告は、「春婦伝」についてで、戦時下の慰安婦の問題に真正面から切り込んでいた。と言いはながらも、GHQの検閲から、田村自身による冒頭の一文、序の文章を引くという、研究方法としても真つ當な手順を踏んでいたのも、ケレン芸でおおむこうを唸らせようとしたわけでは決してない。しかし、田村を論ずるといふのはどういふことなのか、そのことも視野に入れながらの報告なので、制限時間の中で言い切ることには難しかったのではないだろうか。たとへば、GHQによる検閲により「チョウセン・パイ」が削除され、慰安婦のことというかたちで拡散されてしまったことについて、川畑和成氏から、削除されることで今日問題となる帝国陸軍の罪状を弱めてしまったのではないかという問いがなされたことからも覗えた。こういったことも現在生きている我々にとつてはもつともアクチュアルなことだと痛感されたのである。天野氏にとつて、田村泰次郎を論ずることがいかに切実なことなのか、聞き手に伝わった報告だと印象記には記すが、そのようなぶつたるんだ文章を書いたところで何になるのだろうか。

(浅子逸男)

二〇〇七年度春季大会印象記

今大会は天候の不順さの心配されるなか、大阪大学教育実践センターで開催されたが、幸い始まる前には雨も止

み、会場内は盛況であつた。

「鉄道―関西近代のマトリクス」というテーマでのシンポジウムで、ゲストとして政治思想史の(そして鉄道ファンとしても著名な)原武史氏をお迎えし、原氏をトリとして、浦谷一弘氏、田中勲儀氏、田口律男氏の四人の発表者が関西における明治時代から昭和に至る鉄道網の発展と、それが文学作品のなかでどのように形象化されていったのかについて論じられた。個々の発表は刺激的であり、交通機関という媒体が、人々の感性のなかでどのように位置づけられていったのか、また人々の感性の変容にどのような関わりをもつたのかというテーマは、さまざまな新しい通信手段が開発されかつその機能が高度化されていく今日の時代状況のなかで、その原点をとらえなおすための、まさにタイムリリーな企画だったと言える。

ただ残念だったことは(原氏がその発表のなかで、他の三氏の発表を整理しコメントするというディスプレイサント的な役割をされたのだが、個々の発表および発表後の会場での討論が今ひとつ上手く噛み合わず、漸く方向性が見えてきた頃には時間切れとなつてしまったことだろう。それを解消するためには、討論の終わりの頃に質問された浅野氏が指摘されたように、「鉄道」を考察するためには「鉄道」についてだけではなく、鉄道網の発達以前に確立されていた水運との関わりを考察する必要があるのではないかという点、あるいは浦谷氏が発表のなかで少し触れられていた飛行機による輸送網の出現との関わりなどについても、より緻密な論議を重ねる必要があつたのではないかと思われる(こ

の点について、筆者は発表時から感じていたのであるが、印象記の書き手という役割を振られていたために、質問には消極的になつてしまったことを反省したいと思う)。また、討論のなかで田口氏が答えになつていったが、「モノ」としての鉄道(鉄道網、鉄道機関)ではなく、それが文学作品という文字による表象のなかでどのような意味を付与されていくものであつたのかについて、当たり前と言えれば当たり前のことではあるが、より論議を掘り下げていくことができれば良かったと思われるのである。

なお最後に個人的な感想であるが、田中氏が発表で使用されたレジュメの丁寧さと細密さに、氏の鉄道に対する真摯な情熱がありありと認められ、またゲストの原氏による適切なコメントと話題展開の巧みさに感じ入つたことを付け加えたいと思う。

(倉西聡)

浦谷一弘さん「蒼井雄」船富家の惨劇の時刻表トリック。作中の列車・飛行機時刻が現実の時刻表と一致することなどの報告である。ミステリー通・浦谷さんの、まるで作中の探偵のごとき調査によつて、作品の事実に基づく面は確認された。“それでどうなの?”(田口さん)は、肝心な虚構化解明への促しであろう。三谷憲正さんが本作と下敷き「赤毛のレドメイン」家との人物対応を問う訳も、成立論への誘いであろう。なおこの件については先行論文「権田萬治「蒼井雄論」(昭和50・6・1「幻影城」参照のこと。田中勲儀さん「関西の鉄道と泉鏡花」多彩な資料による素材・背景の考証、

自筆原稿の解析などの手がたい実証の方法によつて、作品の成立史を解明した力作である。この一行、実は三好行雄の文言で、田中さんの「南地中心」論を批評したもの(昭和62・1・1「海燕」)なのだが、作品を「鑑」と換えるだけで、今回発表の評要約として過不足なく通る。二十年間鏡花最前線を維持した証に借用しやう。支部切つての鉄道ファンらしいサー・ビスも加わり、資料が楽しい。田中さんは討議時、鏡花以外「視野を拡げ、汽車・市電と文学テーマ新生面について補足する。

田口律男さん「関西」と「鉄道」のディスプレイ―横光利一の場合―。BenjaminやSchivelbuschの著書より示唆を受けて構想したよし。近代的乗り物がもたらしたプラス・マイナスの感覚的変容を、利一の言葉中に求める。昭和の藤村が利一、利一の「修学旅行記」が「家族会議」、「家族会議」の東京・大阪……と雑揉み状に関西の表象を探つた。田口さんは本企画最適パネラー役を演じきる。

原武史さん「私鉄王国」の近代―阪急を中心として―。直前の三発表を論評し、自著趣意と刊行にまつわる挿話を熱っぽく語つた。該博な鉄道知識がほとばしり、御召し列車へ度々の注意に重みがある。ただし三発表評の切り口は専ら鉄道ファンのそれ。作家名・作品名がいろいろ飛び交つたといへ、作品本文・テクスト内部への踏み込みは無い。時間が許せば、原さんからもつと文学論議を聞きたかつた。原さんは我々へ宿題として、例えば・小林一三の表現を残したのかも知れない。『小林一三全集第二巻』には花柳小説「曾根崎艶話」が収録されてい

日比嘉高さん・日高佳紀さんの巧みなりードで「鉄道―関西近代のマトリクス」討議へ進む。浅野洋さんが、田口さん発表の「体験記vs小説」部分を批判し、「近代的乗り物出現による感覚的変容」を表現の問題として考えるよう迫る。田口さんの答えより早く大橋敦彦さんが、田中さん発表の冒頭（石炭の臭ひが好き）（鏡花を振り返り、「廿世紀的憂愁」をそそのエグゾーストの匂い）（稲垣足穂）を添えて応じ、会場が沸いた。日高さんは「列車の出会いと別れ」を、日比さんは「駅」を、浅野さんは「水運衰退」を、それぞれ勘案の要ありと提言。しかし終了時間を迎える。

浅野さんの「抽象的大文字から何が見えてくるのか」という追及に、会場は緊張した。いかにも関西支部大会らしい瞬間か。浅野さんのコメント力に感心するのは今回に限らない。

（堀部功志）

★研究会紹介

主に関西で行われている研究会について、以下の項目順で紹介しします。（順不同）

- ①会の名称
- ②代表者または事務局等、連絡先の氏名・住所・電話番号
- ③会希望者のための入会案内
- ④その他注意事項等

①芥川龍之介研究会

②TEL06-6333-0633 高槻市芝生町二ノ四ノ十五 吉岡由紀彦方

TEL&FAX 072 (633) 2771

③本会は、一九九八年、出身・所属大学の枠を超えて、芥川龍之介とその文学について研究すべく、関西在住の院生・研究生・大学教員を中心に発足されました。現在の例会参加者数は、十〜十五名ほどです。芥川以外の近代作家や、さらに外国文学・比較文学を専門とする方も参加して下さっています。年二回（年末Ⅱ大学の冬休みと夏休み）、土曜日に大阪市内で「例会」Ⅱ「研究発表会」を開催しています。「例会」は大阪で開いていますが、関西以外にも参加されています。そのため、発足当初から数年間は「例会」を春夏秋冬の年四回開き、三年ほど前からは回数を年二回に減らし春と秋に開催していたのですが、地方の大学教員の方も参加しやすいように、「年二回開催」はそのまま「冬休み（十二月か一月）と夏休み（七月下旬から九月上旬）」の開催に変更しました。また、参加者の専門や研究対象の多様化をふまえ、発足主旨の「芥川龍之介とその文学について」も、四年ほど前から「芥川龍之介とその文学を中心とした日本の現代文学について」と、あまり「芥川にこだわらない」方向に変更しました。なお、現在、「会費」「会場費」の類は頂いておりません。ただ、遠方からご参加いただく場合、交通費は各自でご負担下さるようお願いいたします。最後になりましたが、当会では「入会（参加）資格」などは設けておりません。「愛好会」ではなく「研究会」である事をご理解いただければ、基本的にどなたでもご参加いただけます。例

会参加希望の方は、事務局宛にe-mailか往復葉書で連絡下さい。追って「例会案内」を送付させていただきます。

④これまでの「発表題目」「発表者」「会場等」については、当会のホームページ、「国文学」「学界教育界の動向」、「文学・語学」「彙報」、「いづみ通信」に催し、研究会、同人誌などのご案内欄を参照下さい。ホームページのURLは、<http://www.geocities.jp/bookend/ryunosuke5569/>です。メールアドレス・FAX番号をお教え頂ければお返事を頂きます。なお、当会では、経費を抑えるため例会案内の葉書は送っておりません。

①近代部会

②TEL59-0033 大阪市住之江区南港中4-4-1 相愛大学人文学部 日本文化学科合同研究室 鳥井正晴
TEL 06-6612-5900(代)

③漱石の作品を、章を追って丹念に読んでいく輪読会です。

①漱石詩を読む会

②TEL59-8633 大阪市東淀川区大隅2-2-8 大阪経済大学人間科学部 田中邦夫研究室 TEL 06-6338-2131(代)

③漱石の「漢詩」を、逐一に読む研究会です。

①文学論を読む会

②TEL59-0033 大阪市住之江区南港中4-4-1 相愛大学人文学部 日本文化学科合同研究室 鳥井正晴
TEL 06-6612-5900(代)

③現在、バフチンを輪読中です。

①鳥尾文学研究会

②高坂 薫
プール学院大学西尾研究室
③入会等はメールで問い合わせ
nshno@poole.ac.jp

①松山坊つちゃん会

②頼本富夫 TEL790-0833 愛媛県松山市祝谷3-8-6
TEL/FAX089-924-2698
③どなたでも入会可 希望者には規約・振替用紙を送ります 年会費2000円
<http://home.e-catv.ne.jp/booc/han/index.html>

①与謝野晶子を学ぶ白桜会

②TEL90-0906 堺市堺区三宝町1-10-1-811 松永直子
TEL・FAX 072-228-3075
③毎月第二水曜日午後二時〜四時 於精華学習ルーム（大阪・難波）
④講師 入江春行先生（講演と学習会があります）受講料千円。テキストはそのつどプリント配布

★会員の業績

(凡例)

著書名：『』
論文名：「」
掲載誌紙名：『』
注記等：()

※関西支部会員の業績のうち、〇六年四月から〇七年三月までのものを収録した。

※各業績に付した番号のうち、①は単行本、②は雑誌・単行本収録論文、③はその他(研究ノート・書評・口頭発表・項目執筆等)を示す。なお、①は書名・出版社・発行年月の順、②は論文タイトル・掲載誌・発行年月の順で記した。

※掲載誌紙の巻号数は省略し、原則として雑誌は発行月のみ、新聞は発行月日を記した。

※原則として雑誌の編者名・発行書名は等は会員の届出に記載のあるもののみ記した。

※著書名・論文名・掲載誌紙名の用字は、原則として会員届出の記載に拠っている。

ア行の部

青木亮人

- ②「近代の『旧派』の句法」『俳文学研究』〇六年一〇月
- ②「其角堂永機から秋声会へ——明治のもう一つの蕪村受容——」『大阪俳文学研究会会報』〇六年一〇月
- ②「『余情』と『只言』——三森幹雄と正岡子規の応酬から——」

- 『日本近代文学』〇六年十一月
- ②「桃李園俳席の尾碕紅葉」『俳文学研究』〇七年三月
- ・「『天然ノ秩序』の「連想」——正岡子規と心理学——」『連歌俳諧研究』〇七年三月

- ②「俳句の『写生』と日本の韻文の伝統——正岡子規と現代俳句の句法について——」『同志社国文学』〇七年三月
- ③口頭発表「『翁』から『芭蕉』へ——明治俳諧における芭蕉受容——」『第五九回俳文学会全国大会』〇六年一〇月

- ③「俳諧いまむかし(一)〜(五)」『氷室』〇六年十一月号〜〇七年三月号

明里千章

- ①『小出楯重と谷崎潤一郎』小説『蓼喰ふ虫』の真相』春風社 〇六年一〇月
- ②「人面疽の囁き——谷崎潤一郎が作れなかった映画」『昭和文学研究』〇六年九月
- ②「谷崎源氏モノガタリの謎」『芦屋市谷崎潤一郎記念館2007 潤一郎詠源氏物語考』〇七年三月
- ③講演「谷崎潤一郎の歴史小説——『盲目物語』の世界——」中之島図書館百周年記念大阪資料・古典講座 〇六年八月

池川敏司

- ②「オツベルと象——強迫観念に支配された哀れな男——」『国文学 解釈と鑑賞』特集 宮沢賢治 童話の再検討 誕生百年記念 〇六年九月
- ②「宮沢賢治の初恋と短歌——不可解な歌をめぐる——」『国文学』(関西

大学) 〇七年三月

乾口達司

- ②「後藤明生——増殖する言葉と『首塚の上のアドバルーン』」『国文学解釈と鑑賞』〇六年六月

梅本宣之

- ②「中島敦と西洋思想・補遺アナトール・フランクス受容について」『帝塚山学院フランス文学研究』〇七年二月
- ③研究動向「梅崎春生昭和年代以降——『昭和文学研究』〇六年九月
- ③随想「列車のある風景杉山平一詩の「側面」『BOOKISH』〇六年七月

太田登

- ①「日本近代短歌史の構築——晶子・啄木・八木・茂吉・佐美雄——」八木書店 〇六年四月
- ②「前川佐美雄と天理山辺の道——『山辺の歴史と文化』奈良新聞社 〇六年十一月
- ②「『アララギ』の内部論争と啄木——『山辺道』〇七年二月

大橋繁彦

- ②「複数型的上海——論把握淪陥期文化の多元視角」『全球地域化語境下中国文学与日本文学研究：2005年広州国際学術研討会紀要』〇六年四月
- ②「(マラーネ)ゲルハルトの赤い舌——堀田善衛「祖国喪失」からの問いかけ」『国文学研究』〇七年三月
- ③書評「『描写は仮託ではない』とするならば——高瀬真理子著『室生犀星研究 小説的世界の生成と展開』を読む」『実践国文学』〇六年一〇月
- ③研究展望「戦時上海の文学研究の地平を広げるために」『日本近代文学』

〇六年十一月

メンテーター 大阪大学大学院文学研究科共同研究「方法としての越境」

- ③「上海」〇六年十一月
- ③メンテーター 大阪大学大学院文学研究科共同研究「方法としての越境」第4回研究会 「越境と断層」描かれた戦時空間・西東三鬼「神戸」を読む 〇七年二月
- ③コメント プロジェクト創生企画・国際日本文化研究学術交流会「武田泰淳と上海」『言語文化研究』〇七年二月
- ③共同研究「水族館」注釈的読みの試み『日本文芸研究』〇七年三月
- ③講演「光源としてのD・L・プロッホ——上海亡命ユダヤ人が展開した芸術活動検討のために——」神戸・ユダヤ文化研究会文化講座 〇七年三月

奥村紀子(管紀子)

- ③「漱石松山時代の俳句2句鑑賞文」※ペンネーム菅紀子 『漱石松山百句』創風社出版 〇七年三月

カ行の部

岸元次子

- ②「『虞美人草』にあやなす色——さまざまな色の語るもの——」『武庫川国文学』〇七年二月

北川扶生子

- ②「明治期の修辭観と社会進化論——夏目漱石のアレグザンダー・ポープ論に

- おける分裂と可能性」『比較文学』
○六年三月
③「なつかしくて、どこか心細い」尾崎翠の少女小説の世界」『日本海新聞』
○六年五月
③「妹から見る（兄妹恋愛）一塚本靖代著『尾崎翠論』」『山陰中央新報』
○七年三月

- 北野昭彦**
②「志賀直哉『城の崎にて』の（自分）の中の他者の感情—生命危機・静寂・快・不快・不思議・生命凝視・思想転換—」『2006北京大学日本学研究会国際研討会資料匯編』○六年十月

- 木村小夜**
③「物語る喜び」『日刊県民福井』
○六年八月四日

- 倉西聡**
②「神戸在住時代の横溝正史（下）—L・J・ビーストンと岡本綺堂の影響から—」『武庫川国文』○七年二月

- 小林幹也**
②「武田泰淳／上海—『國文学』（學燈社）○六年五月号
②「誰の視点で眺めるか—菊池寛『真珠夫人』の視点人物—」『文学・芸術・文化（近畿大学文学部論集）』
○七年三月
②「宿命へのあこがれ—三島由紀夫『命売ります』論—」『近畿大学日本語・日本文学』○七年三月
③書評「異界はどこにでもある（田中浩）歌集『魔都』評」『玲瓏』○六年五月
○六年一月
③書評「不器用さの持つ強度（永田和

- 宏歌集『百万遍界限』評」『玲瓏』
○六年九月
③座談会「第二十四回『現代短歌評論賞』選考座談会」『短歌研究』○六年一〇月号

サ行の部

- 清水康次**
②「アテネ文庫」の研究（その1）
『京都光華女子大学研究紀要』○六年十二月

- 真鍋正宏**
①「コレクシヨン・モダニズム都市文化 第巻20大阪のモダニズム」（エッセイ・解題・関連年表・参考文献）ゆまに書房、○六年五月
②「〈中年男〉の存在理由」『国文学解釈と鑑賞』別冊、○六年七月
③「シンポジウム〈文学〉はいかに精読しうるか—『正』への接近『正』からの発信—」『国文学解釈と鑑賞』第71号、○六年八月

- ①「言語都市・ベルリン 1861-1945」（共編著、共著者と田博文・西村将洋・宮内淳子・和田桂子）藤原書店、○六年一〇月号
③「森茉莉『甘い蜜の部屋』—「高橋たか子『誘惑者』—」中沢けい『海を感じる時』—山田詠美『ベットダイヤモンド』—吉本ばなな『キッチン』—児玉実英・杉野徹・安森敏隆編『二〇世紀女性文学を学ぶ人のために』、世界思想社、○七年三月
③「いわゆる「谷崎源氏」について」『潤一郎訳 源氏物語考』、芹屋市谷崎潤一郎記念館、○七年三月

- 須田千里**
①「明治実録集」（新日本古典文学大系 明治編13）岩波書店○七年三月
③書評「関谷博著『幸田露伴論』—『日本近代文学』○六年十一月
③「明治の恋、大正の恋—漱石とその弟子たち—」『人環フォーラム』
○七年三月

- 柚谷英紀**
③共同発表「検証・横光利一の中の関西文化圏」横光利一文学会第六回大会
○七年三月

- 外村彰**
①編著『伊藤茂次詩集 ないしよ』龜鳴屋 ○七年三月
②「室生犀星と〈京都〉—庭園観を中心に—」『室生犀星研究』○六年十月
②「家事手伝いの実情 徳田秋声『足迹』—上田博・池田功編『明治の職業往来 名作に描かれた明治人の生活』世界思想社○七年三月
②「岡本かの子『生々流転』論—『水の性』の在処—」『佛教大学総合研究所紀要』○七年三月
③「執筆ノート 外村彰著『岡本かの子の小説（ひた）ころ』の形象」『日本近代文学』○六年五月
③「私は生きる」平林たい子 上田博編『昭和の結婚小説』おうふう、○六年九月
③「新資料 小説『妖気』、詩『春と水』ほか一篇」『室生犀星研究』○六年十月
③「高橋輝雄（詩人・版画家）のこと」『佛教大学報』○六年十月
③「松本正巳氏寄贈 鈴木貞蔵旧蔵資料のこと」『日本近代文学館』○七年一月

- ③「岡本かの子全集未収録資料紹介（二）」『大阪産業大学論集 人文科学編』○七年二月
③「与謝野晶子『みだれ髪』—「山川登美子ほか『恋衣』—」平塚雷鳥『元始女性は大陽であった』—「野上弥生子『海神丸』—」宇野千代『色ざんげ』—「宮本百合子『冬を越す昔』—」岡本かの子『鶴は病みき』—「林芙美子『浮雲』—」壺井栄『二十四の瞳』—「佐多稲子『歯車』—」幸田文『おとうと』—「田中文字子『女面』—」茨木のり子『見えない配達夫』—「有吉佐和子『紀ノ川』—」倉橋由美子『ヘルタイ』—「瀬戸内晴美『かの子撩乱』—」田辺聖子『感傷旅行』—「三浦綾子『氷点』—」曾野綾子『傷ついた葦』—「宮尾登美子『權』—」児玉実英・杉野徹・安森敏隆編『二〇世紀女性文学を学ぶ人のために』世界思想社、○七年三月
③口頭発表「岡本かの子『浴身』にみる自責と自己愛—石川啄木を合せ鏡として—」国際啄木学会（甲南大学）○六年四月
③口頭発表「岡本かの子の小説にみる『家』—『家霊』『過去世』を中心に—」滋賀大國文会、○六年十二月
③口頭発表「〈京都〉と近代文学—室生犀星・井上立士・伊藤茂次、そして岡本かの子—」佛教大学総合研究所共同研究班 研究成果発表会（佛教大学）○七年二月

友田義行

- ②「風景と身体—安部公房／勅使河原宏映画『砂の女』論—」『日本近代文学』
○六年五月
②「歴史的記録と幻想的虚構の狭間から—安部公房／勅使河原宏映画『おとし穴』論—」『立命館文学』○七年三月

- ③ 口頭発表「沖繩からの緊急報告」米軍再編と沖繩、立命館大学国際言語文化研究所シンポジウム、〇六年六月
- ③ 「鏡と牢獄の映像都市」安部公房／勅使河原宏「燃えつきた地図」論、昭和文学会研究集会、〇六年十二月

鳥井正晴

- ① 共著『中国語で聴く夏目漱石漢詩選（CD付）』鎌倉漱石の會、〇六年七月
- ② 「宮園美佳著『濛虚集』論考」に、寄す」（『濛虚集』論考「小説家夏目漱石の確立」）〇六年六月
- ② 「句あるべくも7」鎌倉漱石の會会報『門』〇七年三月
- ③ 「引つ懸りだらけ」の世の中でも「芸究め哲学者の顔に」『毎日新聞』〇六年六月一日夕刊

永江啓伸

- ・「田村泰次郎「肉体の門」——焼跡に立つ少女たち」『皇學館論叢』〇七年一月
- ② 「谷崎源氏をめぐる」『潤一郎記源氏物語考』芦屋市谷崎記念館発行、〇七年三月

中村美子

- ② 「千羽鶴の意義——ゆき子をめぐって」『国文論藻』〇六年三月
- ② 「「技巧」と「技巧」の間」『会報漱石文学研究』〇六年七月
- ② 「増満圭子著『夏目漱石論』漱石文学における「意識」——『有島武郎研究』〇七年三月

永吉寿子

- ② 「編制される〈私たち〉の婚姻——太宰治「ヴィヨンの妻」論——」『百舌鳥国文』〇七年三月
- ② 「斜陽」における〈破壊〉と〈犠牲〉——太宰治の倫理性・『太宰治スタディーズ』〇六年六月

- ③ 口頭発表「占領下の〈学校〉と二重拘束状況——太宰治の昭和二十一年——」昭和文学会秋季大会、〇六年十一月

生井知子

- ② 「志賀直哉年譜考（二）——明治十五年まで——」『同志社女子大学 日本語日本文学』〇六年六月
- ③ 「一つの夢想」『調布市 武者小路実篤記念館 館報』〇七年三月

西尾宣明

- ② 「敗戦」と知識人——『夜の靴』をめぐる覚書——『横光利一研究』〇七年三月

花崎育代

- ① 「葬儀の日——川の兩岸・関係の追究——清水良典編『現代女性作家読本 松浦理英子』鼎書房、〇六年六月
- ① 「生——水・記憶・書くこと——」川村湊編『現代女性作家読本 柳美里』鼎書房、〇七年二月
- ② 「大岡昇平「俘虜」としての戦中戦後」『国語と国文学』〇六年十一月
- ② 「核戦争の危機を訴える文学者の声明」と大岡昇平『日本文学』〇六年十一月

- ③ 「松浦理英子年譜」清水良典編『現代女性作家読本』鼎書房、〇六年六月
- ③ 「書評 野田康文著『大岡昇平の創作方法——俘虜記』『野火』『武蔵野夫人』』『日本近代文学』〇六年六月

半田美永

- ① 「丹羽文雄と田村泰次郎」（共著）学術出版会、〇六年一月
- ② 「丹羽文雄と泰次郎——作品の深層としての故郷——」に収録
- ② 「丹羽文雄『青麦』私論」に収録
- ② 「熊野の文学（近現代）——波及する近代、創造する熊野」『国文学解釈と鑑賞』別冊『熊野特集』〇七年一月
- ③ 「志賀直哉の散歩道」『皇學館大学国文学会会報』〇七年一月

日比嘉高

- ② 「永井荷風『あめりか物語』は「日本文学」か？」『日本近代文学』〇六年五月
- ② 「転落の恐怖と慰安——永井荷風「暁」を読む——」『京都教育大学 国文学会誌』〇六年六月
- ② 「絡みあう「並木」——日本近代文学と日系アメリカ移民の日本語文学——」『京都教育大学紀要』二〇〇六年九月
- ② 「傍流に生きる——菊池寛「身投げ救助業」と琵琶湖疏水——」『佛教学総合研究所紀要』〇七年三月
- ③ 書評「中村三春著『係争中の主体 漱石・太宰・賢治』」『日本近代文学』〇六年十一月
- ③ 書評「内藤千珠子著『帝国と暗殺——ジェンダーからみる近代日本のメディア編成』もしくは「言説分析」とポストコロニアル批評についての自問自答」『日本文学』〇六年五月

細江光

- ② 「名作鑑賞『大津順吉』——再評価のために——」『甲南国文』〇七年三月

Y行の部

増田周子

- ① 「四国近代文学事典」和泉書院、〇六年二月
- ② 「宇野浩二未発表書簡二十八通」関西大学『文学論集』〇六年一〇月
- ② 「宇野浩二童話『王様の嘆き』にみるハイインリッヒ・ハイネ『ロマンツェロ』受容」関西大学『国文学』〇七年三月
- ③ 文壇登場まで〈寂聴文学の世界〉『徳島新聞』〇七年三月
- ③ 文壇復帰から純文学へ〈寂聴文学の世界2〉『徳島新聞』〇七年三月
- ③ 出家へ〈寂聴文学の世界3〉『徳島新聞』〇七年三月
- ③ 出家以後〈寂聴文学の世界4〉『徳島新聞』〇七年三月
- ③ 講演「瀬戸内寂聴の描く京の女」関西大学エクステンションリードセンター、〇六年十一月

峯村至津子

- ② 「怪しうひそむもの」への眼差し『女子大国文』〇六年六月
- ② 「『武蔵野』と「葉」『女子大国文』〇七年一月
- ③ 口頭発表「『文学界』所載の「葉小説」・第回北村透谷研究会全国大会」〇六年十一月

箕野聡子

- ② 「言葉の力を育む 読書教育における

る一考察』『ステラマリス外国語教育研究』〇六年一〇月
②『岡田淳』『竜退治の騎士になる方法』考—今を生きる子ども達—』『研究紀要』(神戸海星女子学院大学) 〇七年三月

宮園美佳

①『『濛虚集』論考—小説家夏目漱石—の確立』和泉書院 〇六年六月
③『「水族館」注釈的読みの試み』『日本文藝研究』〇七年三月

宮山昌治

②『昭和期におけるベルクソン哲学の受容』『人文』〇七年三月
②『中国におけるベルクソン哲学の初期受容—『民権雑誌』柏格森號を中心に—』『成城国文学』、〇七年三月

ヤ行の部

吉岡由紀彦

②『ミハイル・パフチンの〈作者〉について—分類とそれぞれの概念規定—』『会報 漱石文学研究』〇六年七月

吉本弥生

②『武者小路実篤の初期における「画家」への憧憬—「自己」を視座として—』『有島武郎研究』〇七年三月
②『武者小路実篤の「自我」—一九一〇年前後を中心に—』『阪神近代文学研究』〇七年三月

ワ行の部

和田芳英

③講演「ロシア文学者・昇曙夢を語る」奄美市教育委員会主催、〇六年七月
③『昇曙夢再観』『南海日日新聞』(12回連載、「1、没後50年に、奄美発の「記念祭」を〇六年八月一六日、「2、二葉亭没後、一躍文壇の寵児に」八月二二日、「3、「曙夢の時代」金字塔を樹立」九月一三日、「4、愛読された翻訳文学」九月二二日、「5、「ロシア学」全般を俯瞰」一〇月五日、「6、トルストイ生誕百年祭に列席、講演も」一〇月一八日、「7、脚光浴びたロシア学の権威」一〇月九日、「8、革命後のロシアを俯瞰」新ロシア・パンフレット集』8巻を発行)一一月二三日、「9、「プロレタリア革命の金字塔」『ソヴエトロシア漫画・ポスター集』の刊行)一二月一四日、「10、貴重な歴史資料『六人集と毒の園』」一二月二〇日、「11、ロシア文学の影響開明」〇七年一月一日、「12、『ロシア・ソヴエト文学史』で日本芸術院並びに読売文学賞受賞」一月一八日)

渡邊浩史

②『メブリアの要請に応える詩—四季』『歷程』における中原詩の特質をめぐって—』『京都語文』〇六年十一月
②『中原中也と〈京都〉—心象風景として再構築された〈都市空間〉—』『佛敎大学総合研修所紀要』〇七年三月

★おわび メール受信の不備により、「研究会紹介」および「会員の業績」に掲載されなかった方がいらつしやる可能性が有ります。お心当りのある方は、お手数ですが、もう一度、soma@mail.bhexaic.jpまでご連絡ください。次回に掲載させていただきます。会員の皆様にはお詫びを申し上げます。(杉谷英紀)

事務局から

○維持会費の納入が大変少ない状況です。ご協力のほど、何卒よろしくお願ひします。

○本年度春季大会のブックレット『鉄道—関西近代のマトリクス』が和泉書院から、秋季大会当日に刊行されます。ご期待下さい。

☆関西支部ホームページ

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~kindai>

☆関西支部メールアドレス

kansaiibu@mri.biglobe.ne.jp